



スローガン

- 専攻・学部・全学団交貫徹!
各斗争委 — 教授・学校当局
- 無原則的開講阻止!
- 中教審・大学治安立法粉碎!
- 70年安保粉碎!
- 沖縄斗争勝利!
- 全国学園斗争勝利!

——文学部地理学科斗争委員会——

留學生運動と政治斗争

(1) 學生というもの

學生とは一体どのような位置を占めて存在しているものであろうか。一面から言えば強烈的な知的欲求を持ったものであるが、他面から見ればある程度の余裕のある暇處から派遣された食客ということもできる。本来學生は直接労働に参加しない代りに、社会の状況を鋭敏に認識しその矛盾を一つ一つ分析し解決法を思索するものとして社会に還元される。そしてその行動は労働者と比べて食物に直接的に結びついていない事によつてワフが広がりつれており最大限の行動がとれるのである。學生のときどきくいい好きなことをやりたいという発想は好きなことをやっても直轄的にとがめられないことが前提となつているのである。

レハレ現在の學生はどのようであらうか。小学校から一貫して教育機関のレベルの後半として大学が位置づけられ、そのレベルは現体制の中に埋没してしまつた。その結果として運動性がとれない。そして四年間過つと一つのレベルから大学という通行証をもちつた。その間の生活は保護されたレベルへと納められてくる。我々學生は四年間といつて西問と大學という場と校寮料で買ひ、大學側(体制側)はそれらを四年間貸し与えているのである。その中にはある程度の研究(強制的)や活動はできるが、ある程度といつのは義務教育段階までの教育であつて高等教育の場では徹底した研究が行われるべきでありまたそれを行うことによつて本来の大学は存立しているのである。

留學生運動

前述した本来の大学を先取りしてこれを研究をやつた。いこうとすれば現在では体制側とマツツが生じる。何故マツツが生じるのであろうか。ひと昔前まではひと握りの管理者と多くの労働者と生産過程は成り立っていた。しかし世界的な経済の差違や日本の独占資本(日帝)の強化により社会構造はより高度により複雑になってきた。そこで各々の分野での細分化により、ある程度の専門知識を持つ、人面が必ずしもなり、また肉体的労働者もオートメ化、合理化で減少化される傾向になつた。それ故体制側は大学の大きな増強、増設を計り中産労働者を多く得ようとし、その増強がもたらすに私学におしよせてきたのである。マツツの授業はこういふ過程の中で発生して来たのであり、そこでは學生はもはや人面

としてではなく商品として取り扱われてきているのである。そしてその中に於いては大学と構成している教授も學生も餘々に本来的な立場を見失ひ、体制側の思ひような状態へ埋没してしまつたのである。その状況は最初に認識し埋没してしまつたのであり、自分の地位を争うために、食うたの、学問の政治的中立という言葉のカゲに隠れて、その状況から目をそらし、唯飯を食うために黙々と体制側に行つたとして、そこから逃げられられないのであり、いくら立派な研究を何の役に立たないものでも教員としてしまつてゐる。しかし先述の學生(多数の教員を含む)はそのような状況にある自己にいたたまれなくなつて、そこから身をとりださせたいのである。これに対し体制側や支配者としての教授陣はありゆる暴力でも、マツツを圧殺しようとしてきた。これに対する強烈的な闘いが現在の學生運動の本質である。

(2) 政治斗争とのかかわり

學生運動の中でも各々のセクトに属してゐる。それによつては學生運動は政治斗争と短絡的に違ひ理論と実践をもちあわせてゐる。そのセクトにとつてはその英がアイマイである。それをどう克服して政治斗争とのかかわるか、それが現在我々に課せられた問題である。不十分ながらその端緒となるべきものを述べたい。

學生というものが現体制にかゝりては抑圧される(大卒の地位)と堅持することによつてマツツのリアトに対しは抑圧する加害者であることは、客観的な事実である。その加害者としての學生と現存の場合、個人の意識にかかわらず、大学が管理者クラスや生産工場である以上、加害者であることは変わりない。前述の學生運動が被害者意識から発想してゐるのに対し學生の政治斗争は加害者意識から出ているといえる。例えは沖縄問題に於いては本土の人々にはアメリカに統治されてゐる沖縄を容認してゐるものとされ、沖縄人に對して明らかに対峙してゐるのである。そして同様に我々學生運動にとつても今のやうな大学の存在を許してゐる社会全体へ向けての苦境を懸視してゐる良識的一般市民(學生)と敵対してゐるのである。そしてそれ以外の闘う者が連帯をもち得るものが即ち日帝打倒といふスロウガンであり、現在の政治斗争はこの集約である。

討議資料

文学部地理学科国争委員会

佐々木助教教授兼任問題

一月十七日(声)明(原文のまま)

私達は十三日から続行して居る寮生との大衆団交の適定で、教度に渡る確約を破り寮生の強い要求に応える努力が足りなかつた(こと)を充分に自己批判しました。そして私達は私達によつては寮生との討論に充分に努力しなかつた(こと)を自覚し寮生の強い要望に應えて、天野教授担当理事の出席を要請すべく努力しましたし、なほながら私達の努力が足りなかつた事に加えて、天野教授担当理事は十五日夜八時頃から秘密裡に連絡のつかない所になり、私達はこの間はあつた連絡さえもなくなり、さらにもまた、教授会が寮生と直接に接して居る私達の事実認識とはなほ大きく違つた見解を、その一方的に来村が、私達に提出された資料として発表がなされて居ます。私達は寮生諸君との徹底した討論を通じて自らの「主体と責任を寮生諸君に鋭く向われ共働の基盤に立つてこの状況で新たな局面へ押し進めなければならぬ」と自覚しました。従つて今私達はまさしく自らの「主体と責任」によつて寮生諸君との共同の作業を行ひたいと思ひます。

(一) 天野教授担当理事の無責任な行動に強く抗議し、寮連合との団交に出席せしめるよう要請します。

(二) 教授会の無責任な一方的見解によるクラス討議資料は撤回され、訂正の旨を部公表されるよう強く要請します。

(三) 冷間の封鎖が理事会をほじめとする大学当局の責任であることを深くとらえ、私達は、教授担当理事をほじめとする理事会の大衆団交への出席を強く要請します。

(四) 寮連合との大衆団交を妨害する行動に対しては、私達は寮連合の要請に基づいて、全力をあげて、それを阻止します。

(五) 十三日以降の寮連合主催の大衆団交に、全学友は注目し、寮斗争を全学的課題として、全学友、全教職員が深く犯ち、共に闘ふよう要請します。

昭和四十四年一月十七日

私達の力の範囲で最大限の努力をします。

神沼忠雄(理工学部助教)

小野陽一(基社補導主事)

伊藤整二(法学部教授)

野田三(経営学部補導主事)

佐々木高明(文学部補導主事)

宮地國敏(二節補導主事)

植村省三(経営学部補導主事)

小山陽一(産業社会学部補導主事)

見解、評価などの点について、このたびの寮斗争に關する事実認識の誤りを克服することを重要視する立場から署名いたします。

